



Title	第55回意匠学会大会 シンポジウム「デザイン史をどう教えるか？」
Author(s)	川島, 洋一
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56364
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第55回意匠学会大会 シンポジウム

「デザイン史をどう教えるか？」

コーディネーター・司会：川島洋一

事例報告：藪 亨／藤田治彦／面矢慎介／西村美香／谷本尚子

シンポジウムのテーマについて

講義としての「デザイン史」には、美術史や建築史に比べると教え方の方法論や教材などに未開拓の点が多く、こうしたことが議論される機会も実は少ないのではないか、という問題意識から今回のシンポジウムのテーマを提案した。

今回のシンポジウムに先立って、会員に事前アンケートを行った。アンケートでは、授業担当部署、自身の専門分野、デザイン史を教える枠組みとしての立場、使用している教材、映像資料のクレジット、授業に当たっての工夫などを質問項目としてあげた。

さらに、シラバスの添付をお願いし、担当されている授業の基本コンセプトやシラバスの内容、教材や教え方の実際、学生の興味と理解を促す工夫などについて実態を調査し、そこから浮かびあがる具体的な論点について議論したいと考えた。16名の会員から回答を頂き、シンポジウム会場で資料として配付した。

事例報告 13:45-14:45

「デザイン史をどう教えるか？」について、異なる分野で授業を行っている5人のパネリストによって、シラバスを示しながら自身の授業の内容について報告がなされた。

藪亨氏からは、大阪芸術大学では、大学創設当初からデザイン史が開講されており、デザイン学科の必修科目で、教職関連の資格科目でもあると、報告された。授業では自著の教科書を用い、前期後期通年の授業を担当している。

藤田治彦氏は、大阪大学文学部の学生を対象とした授業を担当しており、他の会員との立場の違いを説明された上で、美術史としてのデザイン史の必要性について、説明された。

面矢慎介氏は、「近代デザイン史」と「道具デザイン史」の授業を担当し、「近代デザイン史」ではデザイン史を軸に、「道具デザイン史」では、生活文化の中に位置づけていると報告された。さらに近代デザイン史は、有名デザイナーのデザイン史であり、道具デザイン史は、その応用編としてのアノニマスアプローチのデザイン史だという説明がなされた。

西村美香氏は、本務校ではものづくり系の学生を対象に、非常勤で人文系の学生を対象にデザイン史を担当しており、それぞれ学生の興味に合わせて導入していくようにしていると、報告があった。

谷本尚子は、人文系の学生を対象にしているが、デザイン史を通史として構成するために、技術史を軸に授業内容を組み立てていると報告した。

討論会 14:55-15:45

討論会は、川島洋一氏の司会で、藤田治彦氏、藪亨氏、谷本尚子の3人で行われた。

司会者から「現在、デザインのジャンルを横断的に書いているものがなく、教材として適切なものを見つけられないが、会員はどの様なデザイン史を教えているのか」と質問が投げかけられ、次の3つのテーマについて、討論された。

① 授業の基本コンセプトについて

② ジャンルの関係の理解，全体像の把握についてどう考えるか。

③ 教材をどうしているか。

「①授業の基本コンセプト」に関しては、授業の対象者によって異なるので、一般解は無いという意見が多かった。それでは、デザイン史はどこから始まるのかという問いに対して、マクロで見た場合、モノ作りの歴史となり、高校のデザイン史の教科書を見れば、古代から始まっている。中国のデザイン史は考古学から始められているなどの事例が紹介された。

「②ジャンルの関係」については、司会者から建築家の立場から考えると、近代の室内装飾がデザインの始まりと考えられるとの提案があった。

しかしデザインを生活文化史、或いは民族文化史として捉えるならば、すでに全体像を含んでいると考えられるとの指摘があった。さらに、デザイン史を学問として考えるならば、美術史との連関も無視出来ない。

藤田氏からは、アーツ・アンド・クラフツ運動と印象派の動向が平行であり、両方も芸術史におけるそれぞれの分野の基本コンセプトを示していると考えられるとの意見がだされた。

藪氏からは、歴史的映像資料や技術資料を見れば、ジャンルを横断した歴史的背景が分かりやすいとの見解が示された。この後、会場からの意見を募った。

デザイン史の全体像を把握するためには、ファッションデザインを含める必要があるのではないかという司会者からの質問に対して、鈴木桜子氏からファッション史とデザイン史の史観に大きな違いがあり、これまで相関的に扱われることが少なかったが、今後は双方を統合的に理解する必要があると、意見が述べられた。なお、授業では、ファッション史

とデザイン史を相関的に捉えたチャート式グラフィック年表をオリジナル教材として研究室で作成したとの報告があった。

天貝義教氏からは、『デザイン学研究』（1989年72号）に掲載された阿部公正氏の「デザイン史の確立へ」を参照し、デザイン史が確立した分野として論じられる為には、デザインの基礎概念の確立が要請されるが、現実には難しい。しかしデザインについての多数の異なった見解や理論、意見を橋渡し出来る変換規則のようなものが、デザインの基礎概念のようなものとなる、との意見が出された。

「③教材をどうしているか」については、特に映像資料の学会での共有が可能かについて、討論された。

司会者からの提案は、意匠学会の会員の手持ちの映像資料を学会員の間で集め、共有することはできないか、ということであった。データ資料として蓄積する分科会があれば、可能性はあると結論づけられた。

以上
(文責 谷本尚子)